

特集 精神科医療におけるスピリチュアリティとレジリエンス

ヤスパースの実存哲学からみるレジリアンス、スピリチュアリティ

加藤 敏

『精神病理学総論』(1913年)を著した後、哲学的思索を本格的にはじめたヤスパースは、まず、「限界状況」(Grenzsituation)を鍵言葉にして個人、集団の双方の病理に光をあてる問題枠を提出した。それはレジリアンスの観点に通じる。次いで、超越的なもの(Transzendenz)、暗号(Chiffer)、了解不能なもの(Unverständliche)を鍵言葉にして人間存在の可能性に光をあてる問題枠を提出した。それはスピリチュアリティの観点に通じる。ヤスパースが提起した哲学的信仰は、人々が自らの支えを失う限界状況から、人々が自己の支えを見出し、最終的に互いに認め合う実践的指針を示したものとみることができる。スピリチュアルケアに専門的にかかわる臨床宗教師を宗教の区別を超えて養成する動きがある。その前提として、一旦、個別の宗教の手前に立ち戻り、各種宗教に共通でありうる宗教横断的な地平にたつ必要があると考える。その作業を行う上でも、ヤスパースが追求した抑制のきいたスピリチュアリティは示唆に富むと考える。

<索引用語：ヤスパース、限界状況、哲学的信仰、スピリチュアルケア、レジリアンス>

はじめに

本特集は大変時宜にかなったものであり、企画した山田和夫氏の卓見に敬意を表したい。筆者はかねがね、ヤスパースの思索はスピリチュアリティ¹³⁾の主題とレジリアンス^{10,11)}の主題が密接につながる形で展開しているとみていた。そこで、「ヤスパースの実存哲学からみるレジリアンス、スピリチュアリティ」と題して論じる。

『精神病理学総論』(英語 General Psychopathology) (1913年)³⁾を著した後、哲学的思索を本格的にはじめたヤスパースは、まず、「限界状況」(Grenzsituation)を鍵言葉にして個人、集団の双方の病理に光をあてる問題枠を提出した。それはレジリアンスの観点に通じるものである。次いで、超越的なもの(Transzendenz)、暗号(Chiffer)、了解不能なもの(Unverständliche)を鍵言葉にして人間存在の可能性に光をあてる問題枠を提出した。それは、医学でいえば緩和医療で

問題にされるスピリチュアリティの観点に通じるものといえる。いずれも精神病理学の知に裏打ちされており、精神科臨床にとっても示唆にとみ、今日あらためて吟味する価値があると考えられる。小論では、そうした論点をヤスパースの著作にあたって述べ、彼が説く実存的交流(existentielle Kommunikation)が精神療法ないし緩和医療への射程をもっていることも論じたい。

I. 限界状況とレジリアンス

「限界状況」の概念は『世界観の心理学』(1919年)においてはじめて提出されたもので、ヤスパースの精神科臨床での経験、および第一次世界大戦をはじめとした人類の重い歴史が大きな源泉になっていることがうかがわれる。

限界状況のあり方に関し、次のように規定される。

限界状況において「あらゆるものが流動して、

問題視されるという不断の運動の中にある」(下 p.31)⁴⁾。

限界状況はいわばカオスの渦巻きのなかにある不安定な事態を指す。精神病でいえば、いまだ意味方向性が定まらないたえざる流動性を主徴とする急性期がそのよい例である。ひとたびこうした限界状況に人がおかれたならば、人は自己の拠り所を失い極度の不安に襲われる。そうした事情をふまえ、ヤスパースは限界状況に直面した人間の通常の振舞いを次のように述べる。

「限界状況に直面するときは、ほとんどいつもある心の支えをもっている」

「この心の支えがなければ生活は中断される」(下 p.31)⁴⁾。

この考え方がヤスパース自身の臨床観察に基づいたものであることは容易に察しがつくだろう。実際、統合失調症における世界が没落するといった、ラディカルな世界変容のため、言い表す言葉を失う言語危機¹⁵⁾の事態はきわめつきの限界状況である。同様に統合失調症において世界、周囲が意味不明な暗号と化す意味体験もこれにあたる。こうした急性期の最も浮動状態に引き続き、妄想が紡ぎだされ多少なりとも体系化されると、妄想自体が患者にとって支えになり、まがりなりにも一定の安定をみる。

西欧の社会・文化状況を念頭においた「ニヒリズム」の項でも、これに類したことが述べられる。

「人間はどこかから自分の外部になにか堅固なものを置くことが必要で、それによって自分を防衛することができる」(下 p.45)⁴⁾。

人間は本質的にある種の防衛を必要としているという言葉は、社会的集団のなかで人々が示す種々の振舞いを「症状」(symptom)とみる見方を示している。そのような視点も、精神科臨床を基礎にして導かれたものであると考えられる。例えば、次のように論じられる。

「人間は自分を空虚なものと感じ、あらゆる価値をある彼岸の中においた」

「ヨーロッパの宗教性は再三再四この類型を発生させていた」(下 p.145-146)⁴⁾。

これらの言葉は、ヨーロッパにおけるキリスト教が、人々の限界状況に対する支えとして興隆をみたとヤスパースが考えていたことを示唆する。現在でいえば、新興宗教やセクトにもあてはまることで、種々の宗教、ひいてはセクトは集団における心の支えとして出現したという見方が暗に引き出せる。

そうした点を考慮すると、ヤスパースは種々の社会・文化現象の総体を、人間の精神衛生への配慮という問題意識からみる姿勢を保持していたといえる。しかし、オウム真理教などセクトの行動は極端な例としても、宗教はややもすると周囲に対し攻撃的になったり、自己破壊的になる。ヨーロッパでもキリスト教は激しい宗教戦争に再三突入した。今日においても、カトリックとプロテスタントの宗派の間で激しい対立が続いている北アイルランド紛争の類いは珍しくないだろう。ヤスパースはそうした宗教に由来する諸現象に対する反省から、主著『哲学』において、精神衛生の観点をもちつつ、健康でより適切な宗教的姿勢、倫理は何なのかという倫理的な問題意識を堅持して哲学的思索を進めたとみることができる。

人が自分の存在基盤を失う危機に陥る限界状況から、自分の支えを見いだす過程は、自己回復の動きを示している。この自己回復の力、あるいはその過程は、レジリアンスにほかならない。ここでレジリアンスの概念について述べておきたい^{10,11)}。

レジリアンスを、真のレジリアンスと偽りのレジリアンスに区別する見方がある。真のレジリアンスと偽りのレジリアンスの区別は厳密には難しい。正常と異常の問題は一筋縄ではいかないからである。しかし、柔軟性をもつレジリアンスなのか、硬直したレジリアンスなのかなども区別は実践的な有用性があるだろう。

統合失調症における妄想などは微細にみれば、患者にとって「支え」になることからレジリアンスの所産といえるものの、病的な症状であることに変わりなく、硬直した偽りのレジリアンスというべきである。自傷や他害行為を誘発する妄想な

どは悪性のレジリアンスというべきであろう。

集団病理についていえば、ナチズムが硬直した偽りのレジリアンスの好例である。要するに、1920年代ドイツが経済的な不況のなか精神的な低迷状態に陥る。その限界状況からナチズムが台頭し、民衆は熱狂的に受け入れた。人々の「心の支え」がナチズムに求められたのである。この集団性パラノイアは、悪性のレジリアンスと述べた方が適切かもしれない。ヤスパースは『世界観の心理学』のなかで、「歴史的意識というものは、自らを最高者とする」「神化する」と述べている⁴⁾。その好例としてアドルフ・ヒットラーが念頭におかれていたと推察される。

ついでに述べると、ヤスパースはナチス党が政権掌握をした1933年にフライブルク大学の総長に就任したハイデガーをみて、絶望に陥り、次のように批判した。

「ナチズムによる充実、すなわちナチズムが、この現存在解釈の形式を充実するための内容として経験され、熱狂的に受け入れられた」¹⁾。

ヤスパースの精神病理学の見地からすると、ハイデガーは自らの存在の支えを危うくされる限界状況におかれ、ナチズムによって意味充実を図ったと理解されるのである。

真のレジリアンスについていえば、きわめつきのものとして仏教という悟りの境地があがる。それは受難性をそなえた高次のレジリアンスというべきものである。大きなトラウマに襲われ、手ひどい精神的衝撃が続いた後、これを乗り越え人格的に以前に比べ大きな成長をとげる外傷後成長(posttraumatic growth)などは良性のレジリアンスといえるだろう。

II. 哲学的信仰

1. 暗号文字

ヤスパースは『哲学的定位(哲学Ⅰ)』⁶⁾『実存解明(哲学Ⅱ)』⁷⁾『形而上学(哲学Ⅲ)』⁸⁾の三部からなる自身の思索の総決算ともいうべき大著『哲学』を著した。一貫して人間存在の探究を進めていく思索は、『形而上学』においてスピリチュアリティ

の次元に定位して展開するに至る。

「哲学的実存は、隠れたる神に決して直接近づかないことに耐える。ただ、暗号文字だけが、私が神に対して用意している時に語るのである」(邦訳 p.172, 以下すべて邦訳)⁸⁾。

「神性は暗号のなかに示現、あらわれるが、しかも隠れたままである」(p.144)⁸⁾。

「隠れたる神」「暗号のなかに示現する神性」がスピリチュアリティの次元を指し示していることはいうまでもない。

ヤスパースは、神は本質的に隠れた存在で、ただかだか暗号を通してはじめて神が示され、この限りで現れることを強調する。彼は、本来、隠れている神に性急に近づこうとする熱狂的な態度に距離をおく。むしろ、この誘惑に耐えることが肝要であるとする。

まさしくヤスパースは、この批判的な態度によってこそ、真なる私の実存が生成すると考える。彼自身の言葉をいくつか引用する。

「暗号によって私は、私の現存在のこの場所に即する私の実存的可能性の深い意識を保持する」(p.236)⁸⁾。

「暗号の中に私は滞留する。暗号を私は認識しないで、かえって私はそれの中に沈潜する」(p.174)⁸⁾。

「超越者(超越的なもの、Transdenz)の存在が、暗号文字において聴取可能になる」(p.186, 括弧内筆者)⁸⁾。

こうしたヤスパースの言葉は謎めき、にわかに理解しがたいところがある。まずはっきりしているのは、主体が暗号を目の前にしている、あるいは、自分に差し向けられている暗号があると覚知する事態が生起していることである。この暗号文字の体験は、ヤスパースが『精神病理学総論』のなかで一次妄想体験に関し「その内容は不明だが、何らかの意味が自分に差し向けられているという揺るぎなき体験」(加藤¹²⁾)と特徴づけた一種の意味体験に類比させると、理解が容易になるように思われる。暗号がどのようなものなのかに関してだが、筆者の理解では、まずこの暗号は、ある特定

の明確な意味をもたないし、主体は特定の意味づけをすることを自ら禁じる。つまり、神性に関して人は他なる次元から暗号が差し向けられているのを体験する。その際、暗号に対し意味づけはなされない。そうした意味充実のない意味体験の段階にとどまることによってこそ、神性が覚知され、主体が生成するとヤスパースは考えたように思われる。

さらに、哲学的実存に関して、次のようにそれは緊張をはらんだもので、この緊張を引き受けることこそ肝要であると述べている。

「この緊張は自己存在の純正な現象であるが、しかし同時に苦悶である。この苦悶から逃れるために、人間は神性を自分の本来の近くへ持ち来たらそうとし、緊張を解こうとし、存在するもの、またすがりつく、身を捧げるものを知ろうとする」(p.187)⁸⁾。

ここで言われる緊張、また苦悶とは、神なるもの、つまり神性から暗号が差し向けられているのを知り、しかもその意味がわからない状態にとどまることによってもたらされた緊張、苦悶を指していると解釈できる。すなわち、ヤスパースのいう哲学的実存とは神性にかかわる意味体験にかかわるものであると把握できる。暗号があるという事態が生起するなかで、意味が明らかにならない状態は、いわば長い沈黙を強いられることにつながり、そこで人は緊張、苦悶を余儀なくされるのではないだろうか。たしかにこの緊張に耐えることは相当の精神力を要求される。普通の人は、そうした意味充実のない神性をめぐる意味体験、つまり沈黙の体験に耐えることができず、そこからすぐに撤退して、ある特定の意味にすがろうとする動きは十分納得できるのではないだろうか。他方、意味充実のない暗号にとどまることは緊張・苦悶を耐えることであり、実存の実存たる由縁があるというのがヤスパースの主張である。

ヤスパースのいう緊張・苦悶は、あのデンマークの孤高の哲学者キルケゴールが自ら体験した「不安」と重なる情態性であるとみることができ。たしかにヤスパースが説く哲学的実存は、キ

ルケゴールが不安に直面し、その不安を意味に還元することなく、不安のまま受容した生き方に通じる。ヤスパースはキルケゴールを思想の重大な師であるとし、高い評価をしているわけだが、その最も大きい点はキルケゴール¹⁴⁾が不安を実存の基軸に据え、倫理的態度を重視したことだろう。ヤスパースが『精神病理学総論』、次いで『世界観の心理学』でそれぞれ提起した意味体験、限界状況の概念を用いると、哲学的実存は、意味充実のない暗号の意味体験の緊張・苦悶から撤退せずに哲学の思索の尖端部分で直面することになる限界状況を引き受けることと定式化できるだろう。

2. 不安から安心への跳躍

『形而上学』の最終章「暗号文字の解説」の最後のところで、不安から安心への跳躍について言及がなされる。

「不安から安心への飛躍は、人間がなしうる最も巨大な跳躍である」(p.270)⁸⁾。

「能動的な忍耐は、あらゆる現存在の難破を経験することができ、しかもなお、何らかの力が存する間は（現存在の可能性を）実現することもできる。この（難破と実現の）緊張の中で能動的な忍耐はそれ自らの平静さを取得するのである」(p.271)⁸⁾。

これらの言葉を筆者なりに解釈すると、特定の意味が見いだせない不安を強いられる沈黙の状態に身を委ねていると、同じことだが、意味充実のない暗号にとどまっていると、人間主体は質の高い境地に達する。それは、誤解を恐れずにいえば、仏教でいう悟りに近い境地といえるかもしれない。

統合失調症にひきつけていうと、超越なものの暗号に触れられた人はそれを言い表す言葉を失い、言語危機¹⁵⁾に陥る。そして、人は意味充実をもたらす言語再生が生じない苦悶に耐える。この苦悶のなかにある主体のあり方につき、ヤスパースは「難破」(Scheitern)という言葉も使う。それは「内的な死」ともいってよい主体の決定的な危機を指すとみてよい。ヤスパースにとって正しい生き方とは、人間が自らの様々な衣装を剥ぎ取

り丸裸になる限界状況に自らを投げ出し、それを耐え抜くことであると説いているように見受けられる。

したがって、われわれの問題意識からすると、「不安から安心への跳躍」は自己自身の限界状況、つまり不安からこれを克服するレジリアンスの動きが出現してくることを述べていると理解できる。レジリアンスが不安からなる限界状況そのものを引き受けることによって導かれるという視点は、禪の修行にも通じるところである。

「不安から安心への跳躍」が生じることを述べた後、すぐさまヤスパースは次のように述べる。

「人間の信仰が彼を、不明確な仕方では超越的なもの (Transzendenz) の存在へと結びつける」(p.270)⁸⁾。

要するに、不安から安心へと跳躍が生起するとき、哲学的思索は信仰とひとつになり、哲学的信仰となるといえる。普通、信仰は一定の形をもった宗教的体系を前提とし、そこでは暗号が特定の意味に還元されている。これに反し、ヤスパースにとり信仰は、意味に還元不能な暗号に「滞留」し、いわばあらたな瞬間、瞬間を生きることで、それは永久革命的な作業といえる。

ヤスパースは、神を「汝」と呼び、神に向かって祈る振舞い自体が、暗号に「滞留」することからの撤退であり、こういつてよければ怠惰な態度であるとみる。

「人間が祈りにおいて神性にたよると、それは彼にとって一個の汝であり、この汝に対して彼はその孤独な零落 (の境涯) から出て交わり (の関係) に入りたいと思うのである。そこで神性は彼にとって、父、救済者、立法者、裁き手としての人格的形姿である」(p.189)⁸⁾。

この言葉は、西欧のありきたりのキリスト教全般に対する厳しい批判とみなせる。ヤスパースにとり神を父、救済者、立法者などの役割を果たす汝とみることは、了解不能な超越的なもの (Transzendenz)、また神性を特定な意味に還元することになり、そこには神性に対する無意識の隠蔽作業がなされているということになる。ヤスパース

の主張する哲学的信仰は、宗教の側からみれば種々の宗教の神話性、欺瞞性を告発し、その手前に立ち返って意味以前の神性の暗号に定位して構想されていることが察せられる。

3. 実体性

もう1つヤスパースの哲学的信仰を知る上で興味深いことは、ヤスパースは哲学に関して次のような苦言を表明していることである。

「哲学は諸宗教のもつ実体性 (Leibhaftigkeit) を喪失する」(p.168、邦訳では「有体性」と訳されている)⁹⁾。

哲学は実体性をもたねばならないという指摘は興味深い。それは哲学には信仰の次元を欠かすことができないという認識の表明である。ヤスパースは哲学の思索を究めていくと哲学的信仰に行きつくことになるかと説いているのである。ただし、そこでいう哲学的信仰は、特定の宗教が信仰の対象とするような、特定の規定をもった実体的な神にかかわるのではなく、暗号でしか顕現しない隠れた神 (神性) の限りでの超越的なものの実体性にかかわる。

「暗号文字は、それにおいて自由が超越的なものを顕現させる場合に存在する」(p.169)⁸⁾。

「超越的なものから私は、ただ自己が成るのに応じたそれだけのものを聴取する」(p.170)⁸⁾

「遂には私の思惟 (中略) において私は暗号を聞き取るという経験をするのである」(p.171)⁸⁾。

この言葉には、ヤスパースの哲学的信仰のあり方がよく示されているのではないだろうか。哲学する人は、実体性をもった超越的なものから自分に暗号が差し向けられていることに気づき、その暗号文字の中で意味への傾きを禁じ、自己生成する。これはヤスパース自身の哲学的思索のあり方を率直に述べたものと受け取れるだろう。だとすると、ヤスパースは超越的なもの、あるいは神性の存在に関して実体的意識性を体験していたと推察される。それは知覚でも表象でもない意識性 (Bewusstheit) の様態において覚知される。

それは統合失調症の体験に類比される他性の実

体的体験である。

「この神性は、疎遠（他, fremd）なるものとしてこの世界へ入り来り」（p.145, 括弧内筆者）⁸⁾。

「(中略) 了解のなかで、存在実体の本来的に了解不可能なもの (Unverstehbares) に触れる」（p.174）⁸⁾。

「私は自分の所業のための最も深い衝動を経験し、私は超越的なもの (Transzendenz) の暗号によって微かに触れられるのである」（p.179）⁸⁾。

ここに叙述された、絶対的に他なる神性が世界の外から主体へともたらされる、それは了解不能なものである、主体は超越的なものの暗号に触れられるといった体験は、統合失調症に特徴的な病的体験と一定の平行性があることは興味深い。これは、意味充実のない意味体験の別な表現であることはいうまでもない。

4. 了解不能なもの

ここで、了解不能な事象が肯定的に位置づけられていることに注意を促したい。

「自然現象をわれわれは説明し、心の生活 (Seelenleben) をわれわれは了解する」。これは哲学者デイルタイによる有名な定式である²⁾。ヤスパースは『精神病理学総論』において、病的な心の生活を考察の対象にして了解関連の問題を深め、特に『精神病理学総論』第4版以後、第1章「心の生活の主観的現象 (現象学)」に引き続く第2章『心の生活の了解関連 (了解心理学)』において、デイルタイによる定式に大きな修正を加えた。その骨子は次の文章にみることができる。

「関連を了解する場合、我々は了解不能なもの
の限界に突き当る。この了解不能なものには、一方においては、了解しうるものが超えられぬ制限である意識外のものがある。それは肉体として我々を担っているものであるが、これは因果関連によって把握すべきものである」（中巻 p.10）⁵⁾。

「因果的に探究される方面では、了解不能なものは、衝動や生物学的身体事実や、その時々
に推測される特殊の意識の機構などに現れる。それは

あらゆる正常の生活にも現れており、病的状態や病的過程の折りにも、異常ではあるが現れている」（中巻 p.10-11）⁵⁾。

「他方においては、了解不能なものは了解可能なものの源泉 (Ursprung des Verstehbaren) として了解しうる以上のものである。実存の無制約的なもの (Unbedingten) の中からこれを掴みとるならば、それは了解可能な生成存在 (verstehbar Werdende) として自己を開示する」（中巻 p.10, 下線筆者）⁵⁾。

通常少なくとも精神医学では、ヤスパースのいう了解不能なものは生物学的要因によって説明されるしかないとする理解が優勢なように思う。たしかに『精神病理学総論』初版では、了解不能なものについては、単に「存在する脳の病的過程の結果と解する」（p.181）³⁾といったことが述べられるだけであった。ところが、第4版以後、『哲学』三部作で明らかにした思索をふまえ、ヤスパースは了解不能なものを肯定的に主題化する姿勢を明確にするのである。

了解不能なものは、通常理解で了解可能とされる事象の源泉であるという見方はかなり踏み込んだ洞察である。そこには、いわゆる心理的了解を超えた次元で、つまりより高次の次元で了解不能なものを了解しようとする試みがみとれる。了解不能なものは、極限では了解可能なものとして生成してくる存在である (verstehbar Werdende) という穿った見解も示す。この存在こそ『形而上学』で主題化される超越的なもの、あるいは包括的なもの (Das Umgreifende) である。

5. 包括的なものへと高まる哲学的信仰

注目すべきことに、ヤスパースは、包括的なもの (Umgreifende) へと高まる哲学的信仰において、自己と他者の結びつきがなされることを次のように説いている。

「一つの包括的なものの中で他方に結びつけられていることを自覚することができた」（p.170）⁹⁾。

つまり、ヤスパースのいう哲学的信仰は、自己と他者がいかに相互に認め合う人格的關係を結ぶ

のか、という倫理学の中心問題ということができ、自己と他者の相互承認にかかわる実践的指針を示したものとみることができるようになる。こうして、相互承認は、意味充実のない暗号文字のレベルで自己と他者がともに超越的なものへと差し向けられることによりなされる。これは今日あらためて再吟味に値する考え方であると思われる。

実際、人間が、他者とともに生きていく上で、既成の宗教や新宗教、ひいてはセクトなどのレベルで結びついているだけでは、他の宗派との争いが起こるといえるように、相互承認には至らない。ヤスパースからすれば、種々の具体化された神へと意味づけされる手前の、単なる実体的な超越的なものから差し向けられる暗号言語に定位して、人は相互承認へと至る通路を手にする。その意味では、ヤスパースによる暗号の哲学、超越的なものにかかわる哲学的信仰は、人間の倫理を説いた和解の思想と位置づけられる。そうした倫理的思想が提出された背景には、狂気に陥ったナチスドイツの痛ましい悲劇があると考えられるように思う。ヤスパースは精神医学者としても、世の中の人々がいかに相手を尊重しながら共生できるのか、その倫理的指針を模索したように考えられる。その模索の試みこそ『哲学』三部作ではないか。

後期ヤスパースの心の支え、限界状況においての心の支えを問題にするなら、それは暗号としてしか顕現しない隠れた神への敬虔な信仰に帰着するといえる。後期のヤスパースはこの神への信仰を前面に出している。それは、カントの意味での批判 (Kritik) に裏打ちされた信仰とっていいだろう。こうした神への哲学的信仰は、祖国ドイツがナチズムに支配され、この集団的妄想を心の支えにして大きな犯罪を犯してしまったことへの真摯な反省の念から、導かれた面が少なくないと考えられる。ナチズムによりヨーロッパでは、とりわけドイツでは、人々の存在基盤が失われてしまったわけで、そういったヨーロッパのニヒリズムの克服の処方箋として彼は哲学的信仰というものを打ち出したとみることができるようになる。

哲学的信仰は限界状況に対するレジリアンスの歩みとみなされるのである。

III. 精神療法、緩和医療にとって哲学的信仰 (ヤスパース) がもつ意義

『精神病理学総論』のなかでヤスパースは、精神療法について、様々な技法にまさる実存的交流 (existentielle Kommunikation) の重要性を指摘する (下巻 p.365, 原書 p.668)⁵⁾。彼自身は述べていないが、実存的交流は哲学的信仰に基礎をもち、実存的交流の極致は、医師と患者の出会いにおいて、患者が医師とともに超越的なもの (Transzendenz) に開かれ、実存が呼び醒まされ、自己存在になる時だと思われる。このように、了解不能なものは精神療法の過程において主題化され、自由の境地が生まれることが期待される。

超越的なものは言語の限界点で生成してくる神性を帯びた暗号的存在と思われる。この超越的なものは絶対的に他なるもので、了解不能なものの最たるものである。その限りで、人間主体が質の高い境地に達するのに欠かせない次元であるとヤスパースは考える。

この点について『精神病理学総論』では、次のようなかなり難解な言葉が語られる。

「実存の方面では、了解不能なものは、自由 (Freiheit) である。その自由は、無制約的決断や絶対的意味の把握の際に現れる。またその自由は根本経験の中に現れ、その時、経験的狀況から限界状況が生まれ、実存を呼び醒まして、自己存在とする」(中巻 p.11, 原書 p.256, 下線筆者)⁵⁾。

筆者の理解できる範囲で誤解を恐れずに述べれば、この超越的なものの立ち現れは、それを前に人は言葉を失うため、不安にさせずにおかない。この言語危機が限界状況である。そこを耐えてこそ、実存が呼び醒まされ、高次の自己になる、それこそ人間にとって自由になる機会であると、考えられているように思える。

多くの人にとり最も卑近な不安、そして了解不能な事象の最たるものは死ではないか。同胞の死、自分の死いづれについても了解不能である点

では共通している。個人的なことをあえて述べさせていただくと、筆者の父（88歳）が突然、心筋梗塞で急逝して10年を迎えようとしている。いまだに、この死は心にぽっかりあいた深い穴のようで、なんとも言葉に言い表しようのない不可解な悲しい出来事として続いている。他方、愛する人の死以上に、自己の死に直面することは、すべての人にとり限界状況となりうる。ドストエフスキーは「死は呪いである」と自分の死に対する激しい恐怖を表明した。

キリスト教、仏教など世界の公認の宗教は死後の世界についての物語をもっている。それは死の限界状況に対し人に支えを与えるレジリアンスの機能をもっていると思われる。死を前にした人がもはやこの物語により所を見いだせないとき、裸形の不安が浮上する。

そうした状況のなか、医療において医師から病名告知がルーチンになされるようになってきた昨今、死を前にした限界状況に無防備にさらされる人が増えてきていることは間違いない。病名告知を契機にした不安障害、うつ病は総合病院では今やきわめてありふれた現象である。これは現代人の選択の結果であることを認めなくてはならない。その際、人は限界状況に耐えるべく、あるいはまた医療者は患者に限界状況を耐え抜けるようスピリチュアルの次元でのレジリアンスの座標軸をもっておくことが望まれる。

おわりに

スピリチュアルケアに専門的にかかわる宗教人、つまり臨床宗教師を宗教の区別を超えて養成する必要性が一部で説かれている。筆者もこの提案に賛成である。その前提として、一旦、個別の宗教の手前に立ち戻り、各種宗教に共通でありうる宗教横断的な地平にたつ必要がある¹³⁾。その作業を行う上でも、ヤスパースが追求した抑制のきいたスピリチュアリティは示唆に富むと考える。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) Biemel, W., Saner, H. 編 (渡邊二郎訳)：ハイデガー＝ヤスパース往復書簡1920-1963』〔1922年6月27日付書簡〕。名古屋大学出版会、名古屋、p.271, 1994
- 2) Dilthey, W. (丸山高司訳)：記述的分析の心理学。論理学・心理学論集(ディルタイ全集第3巻)。法政大学出版、東京、p.638-671, 2003
- 3) Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie. Ein Leitfaden für Studierende Ärzte und Psychologen. Verlag von Julius Springer, Berlin, 1913 (西丸四方訳：精神病理学原論。みすず書房、東京、1971)
- 4) Jaspers, K. : Psychologie der Weltanschauungen. Springer, Berlin, 1919. 6. Aufl., Piper, München, 1985 (重田英世訳：世界観の心理学。創文社、東京、1997)
- 5) Jaspers, K. : Allgemeine Psychopathologie. Fünfte Auflage, Springer-Verlag, Berlin, 1948〔内村祐之、西丸四方、島崎敏樹ほか訳：精神病理学総論(上・中・下巻)。岩波書店、東京、1953, 1955, 1956〕
- 6) Jaspers, K. : Philosophie I, Philosophische Weltorientierung. Julius Springer, Berlin, 1932〔武藤光朗訳：哲学的世界定位(哲学I)。創文社、東京、1964〕
- 7) Jaspers, K. : Philosophie 2, Existenzerhellung. Julius Springer, Berlin, 1932〔草薙正雄・信田正三訳：実在開明(哲学II)。創文社、東京、1964〕
- 8) Jaspers, K. : Philosophie 3, Metaphysik. Julius Springer, Berlin, 1932〔鈴木三郎訳：形而上学(哲学III)。創文社、東京、1964〕
- 9) Jaspers, K. : Der philosophische Glaube. Gastvorlesungen. Zürich 1948〔ジャンヌ・エルシュ(北野裕通・佐藤幸治訳)：カール・ヤスパース―その生涯と全仕事。行路社、東京、1986〕
- 10) 加藤 敏、八木剛平編著：レジリアンス 精神医学の新しいパラダイム。金原出版、東京、2009
- 11) 加藤 敏編著：レジリアンス・文化・創造。金原出版、東京、2012
- 12) 加藤 敏：『精神病理学総論』(ヤスパース)の今日的意義。臨床精神医学, 43 ; 131-143, 2014
- 13) 加藤 敏：宗教(カトリシズム、プロテスタンティズム、仏教)が医療に果たした役割一わが国の緩和医療の今後を考えながら。精神経誌, 116 ; 936-949, 2014
- 14) Kierkegaard, S. (原 祐、飯島宗享訳)：不安の概念(世界の大思想24)。河出書房、東京、1967
- 15) 宮本忠雄：言語と妄想。危機意識の病理。平凡社、東京、1974

Resilience and Spirituality Considered from Viewpoint of Existential Philosophy of Karl Jaspers

Satoshi KATO

Oyama Fujimidai Hospital

After publishing “General Psychopathology” in 1913, Jaspers turned his attention to serious philosophical contemplation. Using the term *grenzsituation* (limit situation) as a key concept, he first presented a framework to shed light on the pathology of both individuals and groups, and this led on to include the perspective of resilience. He then used three more key concepts, *transzendenz* (transcendence), *chiffer* (cipher), and *unverständliche* (unintelligible) to offer a framework to focus on the possibilities of human existence. In the field of medicine, this is useful to support a spiritual approach which is discussed in palliative treatment. The philosophy developed by Jaspers can be considered as indicating a practical form of guidance for people to find self-support from a limit situation where they have lost their own support, and finally, come to a degree of mutual acceptance. Mutual acceptance is made possible at the level of ciphers, in which specific meaning remains undefined, by directing both the self and the other toward a state of “transcendence.”

Nowadays there is a trend for those chaplains involved in spiritual care from a specialist point of view to be trained to effectively transcend any difference in religious belief. As a basic premise, the author considers there is a need to once again return to a state before the start of individual religions, and stand on a cross-sectional ground level, an area which could be regarded as common to all religions. When conducting such a task, in the author’s view, the restrained spirituality that Jaspers expounded is thought-provoking.

< Author’s abstract >

< **Keywords** : Jaspers, *grenzsituation* (limit situation), transcendence, spirituality, palliative care, spirituality >
